NPO循環生活研究所・コンポストアドバイザー養成講座に参加して

別府大学文学部人間関係学科
助教　長尾　秀吉

今年７月26～27日の２日間、福岡市東区に拠点を持つＮＰＯ法人循環生活研究所（以後、循生研）による「ダンボールコンポストアドバイザー養成講座」が開催された。筆者が福岡から別府に移り住んで６年目。循生研の役員として関わってきた経緯もあり、循生研から「大分でコンポストアドバイザーやらんね」と誘われ、今回初めて参加することになった。報告では、この講座に参加して学んだこと、考えたことを紹介してみたい。

1 ダンボールコンポストの普及にむけて

ダンボールコンポスト（以下、ＤＣ）について簡単に紹介しよう。ＤＣはダンボール箱に量販店で売っているピートモスともみ殻くん炭を入れて混ぜ合わせたら準備完了。あとは１～２ヶ月ほど家庭の生ゴミ（500g～1kg／日）を投入する度に混ぜるだけで失敗や不快な思いをほとんどせずに良質の堆肥をつくれるという、簡単な堆肥づくり装置である。またＤＣは地域生活に溶け込みやすく、日常会話での堆肥談義、果ては地域づくりに役立つコミュニティツールとしての魅力を持っている。

東区の青年数名とお母さんたちの知恵による小さな循生研の活動が始まって４年目。だが、循生研の活動の核であるＤＣ事業はまたたく間に地元に広がり、マスコミにも全国紹介され続け、地元から全国までそのノウハウを学ぼうと多くの人が循生研の視察に訪れるようになった。循生研にとって予想だにしない事態となり、現在、常時十数名とスタッフ数と増えたものの、19年度にはＤＣの出前講座だけでも317回、その他を数えるとほぼ365日フル回転を続けている。ちなみに受講者数は年で１万人を超える。こうした中、循生研のＤＣの普及活動の実践者（アドバイザー）養成が大きな課題となっており、アドバイザー養成講座が開かれるようになった。

2 アドバイザーの役割と養成

今回２日間の養成講座には筆者を含めて約20人が参加していた。以外に少ないと思われるかもしれないが「現在のスタッフで濃密な講座にするために最大の数」であり、抽選確立は１／２と選にもれる人も多い。また、参加費は一人２万５千円。それでも東京、岐阜、島根など全国からＤＣの魅力にはまった人が集まり、盛んに自分たちの活動紹介や情報交換が行われていた。（＊写真１）

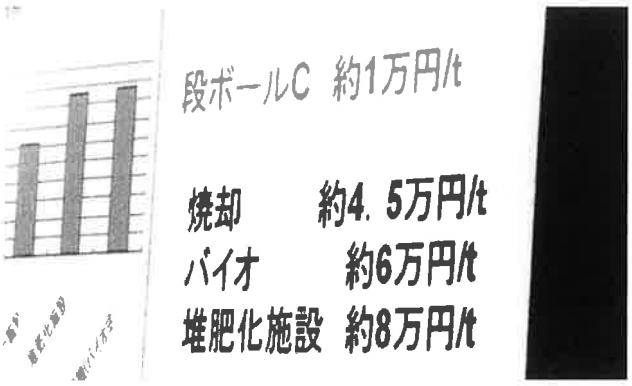
■写真１．会場の様子

参加者は女性が主。だが、年齢層は幅広い。

講座の内容は、まず養成講座の目的とプログラム説明から始まり、次いで循生研の設立経緯と主旨説明、またＤＣを用いた地域づくり活動の広がり（出前講座・畑講座・基材開発の実際）と定着率・効果について独自分析結果が示された。（＊写真２）

ＤＣの魅力は人によって様々だが、えてして生

■写真２．講座の内容



ダンボールコンポストのゴミ処理コスト

ゴミ削減や地球に優しいライフスタイル、あるいは良質の堆肥ができる点に注目が集まりやすい。けれども、循生研のアドバイザー講座では、こうしたさまざまな魅力（個々の生活者のニーズ）に寄り添いつつ、「堆肥から広がるコミュニティづくり」というより大きな魅力（目標）にアドバイザー自身が気付き、顔の見える小さな地域に循環と人のつながりを実感できるようになることが重要であると強調された。

そして、個々人の具体的な生活ニーズに寄り添って質問に応えていくため、また地域に循環の輪をつくっていくためには、アドバイザーは活動事例を学ぶだけでなく、「人に納得してもらえる知識と技術をもつ」ことも強調される。そのため、養成講座では多くの時間が「堆肥についての知識や技術（ＤＣ以外のコンポスト機能の長短、微生物の働き、堆肥の化学的成分とその計測方法、攪拌のタイミング、ＤＣ基材の研究結果…など）の習得に当てられている。（＊写真３）

■写真３．実験の様子

参加者で堆肥のPHを測定中

筆者のような素人には難解な話もあったが、「コンポストでも二酸化炭素は発生する」（生ゴミを燃やすと温暖化ガスが排出され、コンポストからは温暖化ガスが出ないと誤解している人も多い）といった知識、堆肥成分の分析実験の技術など、ＤＣアドバイザーとして必要な知識・技術の習得の時間が多く、参加者にはとても有意義であった。

③ 組織の財産を外部に提供すること

紙面の関係で、循生研の活動や養成講座については別の機会に述べる。そこで、最後に今回の養成講座に参加して考えたことの一つを述べたい。それは、ＮＰＯという市民団体による人材育成のあり方についてである。

循生研は補助金を得ているとはいえ、経費の大部分を「自己開発」した基材の販売や講師料で賄う自律型のＮＰＯである。ＮＰＯ法人である循生研の財産は、循生研のメンバー自らが積み上げてきた経験（知識・技術）といえる。ふつう、企業やＮＰＯでは組織に蓄えた財産（知識・技術）を外部に出すことは、自らの組織のやせ細りにつながりかねないとして外部公開されることはなく、また公開されたとしてもノウハウ取得にかかる費用は高額に設定されやすい。

けれども循生研では、そうした不安を振り払うかのように「ＤＣを通じたコミュニティ・循環」にこだわり、養成講座を通じて外部の人にも組織の財産を惜しみなく提供している。それでもなぜ、この循生研というＮＰＯは活動がやせ細らずに、拡大しているのだろうか。参加を通じて思ったこの疑問について、今後はＤＣアドバイザー活動をやっていきながら考えてえていきたい。